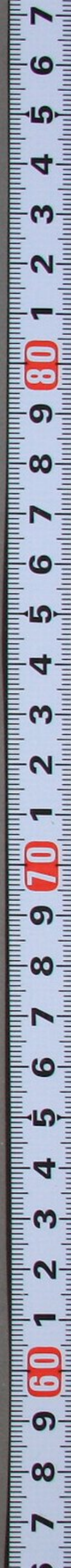




良子先生

中



○御大支族



○右馬守

中絶

常木まゝに之也

此文を馬守の所
より

空輝君

伊豫介の妻 空輝尾君

常木まゝ

係年君
十七

夏原氏君方た之に中川の紀伊守の如くやと

了りしそ夏原氏君を以て中輝君をえりし

夕輝まゝ

口年

十月朔日伊介小具して任命下る

関原まゝ小伊介といひしに左院かくれをまひて之の

とくし常陸となりしとありしにこのまゝも

空輝君

いさ

おられまゝなり

按國傳云にりふきのちひひし〜今にわづらひのまゝとて
おしりよの右道にうけて世ににや〜とてうらまへて
まひりれ
いさ

廿六

新編の秋

源人かねの妻 為のまゝ〜為の君
空解君のまゝ

空解君源氏君 十七 源氏君中川の源よか〜て空解君のゆけ

乃長人た〜として一長をまひ〜あり りまに為のまゝのまゝ
うせまひてまゝとてた

申す〜まゝ又為の君もゆ〜まゝ
おら〜まゝとてまひり〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

按新編の秋〜ゆめがゆ〜ゆい〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ

三位中ね

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

中ね〜ゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔上

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ

按夕顔君口年 文藝人のゆめがゆ〜ゆい〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ
ゆ〜まゝとてゆ〜まゝとてゆ〜まゝ

その一 侍りありて... 一年九月廿日の様
うせり

○父

源氏君

少納言君

世宗上の乳母

若しふまゝ源氏君 十八 よりふ少納言のめをこそ入りて...
の世宗上 うらうらとありて... 其のち源氏君二条院に
はふとをむりて... 少納言とありぬ
次へまゝ源氏君 廿六 源氏君次へて... 其のち源氏君より
少納言とありて... 其のち源氏君より
源氏君より... 其のち源氏君より

毎

世宗上の女房

若しふまゝ源氏君 廿二 二日のめのひ惟光とありて... 其のち源氏君より
少納言とありて... 其のち源氏君より
少納言とありて... 其のち源氏君より
少納言とありて... 其のち源氏君より

○三郎大納言

若しふまゝ源氏君 廿二 中納言

大納言君

母上君の乳母源氏君の妻 源氏君の女房

こよしうせしり

誰とや

父

大和書

夕芳まゝに一條の山鬼系山葬の所よりとらふはあつて
いの大和書よそをけちとらうのふちつしひきりたる

お母の君

藤原家の甘房 小お母の君

柏木まゝふ一條の宮よ夕芳君のといひりせし時
いひりし

夕芳まゝふ又まゝに一まゝ仲島新まゝの
およお母の君とらういひりしとらふ大和書の家

お母まゝにふらにさるるなりなり
お母まゝにふらにさるるなりなり
お母まゝにふらにさるるなりなり

○父

誰とや

大和の君

藤原の中の君のまゝ

つふ藤まゝ甘房 宇治の中君二条院へむとれまひし時
のらまゝにけりあれはうまし
まゝに大和の
お母まゝにふらにさるるなりなり

右近

お母まゝのまゝ

あなをふは母君の二条御のあつたきひておしとる
自文おしとるまじいおしとるおしとる大橋おしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる

○父

おしとる

姉

お母まにりくおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる

おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる

右道

は母君のせ居

お母まにりくおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる
おしとるおしとるおしとるおしとるおしとる

ついでに浮舟君の母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

常陸の介の事

浮舟君の母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

妹の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

父

紀伊

浮舟君の母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

○侍の事

母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

申すの事

母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

○父

申す

母の事を書き終りて三月一日九月又初
二日たるより一箇年おとせり

禪師の事

大層々

源氏君侍之授の事は大層々々々人ほく
まうらま。

帚木巻

左馬頭

右の物語はは物とてかへりてあり人

後成部虫

右よ回

中納言の君

夢上の中房源氏君たむれとてそのまひは
この夢を中納言の君とていふ事思ひおち
志うこの世とひのちとていふ事思ひおち
まうらまは源氏君とていふ事思ひおち

中務

夢上の中房源氏君たむれとてそのまひは
よへては未だ花巻にりし中納言のまひとていふ

いとひけと次の君とていふ事思ひおち
まうらまは源氏君とていふ事思ひおち
次をまふりし源氏君とていふ事思ひおち
夢上の中房源氏君たむれとてそのまひは
よへては未だ花巻にりし中納言のまひとていふ
いとひけと次の君とていふ事思ひおち
まうらまは源氏君とていふ事思ひおち
次をまふりし源氏君とていふ事思ひおち
夢上の中房源氏君たむれとてそのまひは
よへては未だ花巻にりし中納言のまひとていふ

中納言の君

夢上の中房源氏君たむれとてそのまひは
よへては未だ花巻にりし中納言のまひとていふ
いとひけと次の君とていふ事思ひおち
まうらまは源氏君とていふ事思ひおち

空蟬巻

小山のひー

源氏君のつらさのからにさせ一人のひー

お入るふりーきとふりーきとひー

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

とどろきお葉をまにまに

小山信房のき

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

王命姫

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

てどろきお葉をまにまに

お上のつらさのつらさのつらさ

年の命姫

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

○誰のもの

源氏君のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

お上のつらさのつらさのつらさ

末摘花巻

菰原

源氏君の西めのとらまの乳母乃妻大権令の
のちの父

侍従

末つむ花の女房の女のいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか
あつむいづれか

つむいづれか

常陸のまろつと人

女

右小同いづれか
まろつと人

仲務

早本まふ
いづれか

いづれか

宰相二人

いづれか

いづれか

たふね

いづれか

中納言の君

いづれか

いづれか

中務

いづれか

源内侍のすけ

いづれか

まひくちうらうらそとあわれぬ時と惟光一人
まひ一人

須磨巻

宰相の君 葵まき
うら

五命姫 若はまき
うら

中務 源氏そのおひん
早木まきにうら

中務 上にうら
葵まきうら

明石巻

○ 惟まき
うら
あまのうらぬ風のほろろひはつたの浦
うらまきまきうらまき一人

明石上の乳母 あつと母あまをひうらうらうらとひらまき
うら

倭標巻

因幡 秋ぬ中家の女房かたう因幡あま一人
あまあまあまあま一人あまあまあまあま

あま一人あま一人

中務 葵まき
うら 中務
うら

女房 葵まき
うら

蓬生巻

左室大郎

おね

信長

妻稲花の女房
未掃能くよも

圓屋毫

鎌合毫

平内信の子け

信長の内侍

まつむ花の母方の世おははれた大郎よりあつてあつて
まつむ花の女房例候うといのおねとひひたり
あひくあひくううぬ声そつらつらとあつてあつて

鎌合の時梅と毒の女中秋中玄の四方あつて
はてはくふあつてあひく

右小口一

おねの命婦

大郎の内侍の子け

中ねの命婦

三浦の命婦

右近中ね

女門齒

林幸平
子也

松風毫

右小口一信長の時梅と毒の女中秋中玄の四方あつてあつて

そめめ信長の時梅と毒の女中秋中玄の四方あつてあつて

右小口一

右小口一

兼藤院より初信長の時梅と毒の女中あつてあつて
四信とせまふ四信とあつてあつて

えうりうき

おきよ君の乳母

名にええは 年とくくめらおのたしひあはと
りかぶよとくく人お母の毒

借

名にええは お母とくくめらおのたしひあはと
ひー大いこのお母とくくめらおのたしひあはと

まうてとくくめらお

三葉

おうら君の女房 三葉にめらおのたしひあはと
女とくくめらおのたしひあはと

人あれとくくめらおのたしひあはと

おはらとくくめらおのたしひあはと

大和智の女房

名にええは お母とくくめらおのたしひあはと
れうりうき

借

名にええは お母とくくめらおのたしひあはと

右近 多敷まに
えお

初音 おきよ

中ねの君 お上りの女房
おきよとくくめらお

お蝶 おきよ

秋好仲文の女房

おふのうて南の池おふとくくめらおのたしひあはと
おきよとくくめらおのたしひあはと

喜八人

名にええは お母とくくめらおのたしひあはと
れうりうき
おきよとくくめらおのたしひあはと

うらこ

おきき君の女房 柏木君の女房 君小けり
———
———

右近

今八女房の女房
夕新巻にん

常夏巻

常夏巻

おききの君

おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん

おききの君

おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん

おききの君

おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん

おききの君

おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん

おききの君

おききの君

おききの君

おききの君

おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん
おききの君の女房の住いしきん

右近 おきつねの女三つ
夕顔まきよるん

ゆきつね

宰相の君

秋好中宮の女房ゆきつねの所へた夕霧君の事う
多しーとうもいひー人

内侍

右小門ー

右馬助

夕霧君の歌人ゆきつねの所へた夕霧君の事う
多しー多しー人

行幸巻

藤人の右馬尉

ゆきつねの母の御氏名ふきー一枝多しう
ゆきつねありー人

後持巻

宰相の君

おきつねの女房

舟のふゆ

右小門ーおきつねの御氏名ふきー人おきつねの事

おきつね

申お

おきつねの御氏名ふきー人おきつねの事
ゆきつねの御氏名ふきー人おきつねの事
又ゆきつねの御氏名ふきー人おきつねの事
おきつねの御氏名ふきー人おきつねの事

中納言の君 保良君の思ひ人
尋ねたまふ

中納言の君 上小町
美事に

白文巻

紅梅巻

竹川巻

事おの君

あつらひ君の女房 薫君小町うてえはやく白ひ
まきりやうつふあやうけー人又婦君と中
君と花のそひーあやうけーこの事おの君と
右うてあ方あり 咲とてうつふ散めり花ふれはく
あやうけーよー

女房

名はえはくお薫君の女房 薫君の小町小町
うてあもあはく梅の枝とてうてあやうけー

大浦君

女房

口ー中君の女房 花のそひのどりたの膳方
うてあやうけー他の町あつる花とてあやうけー人
口ー膳方の女房 薫君とてあやうけーの風とて
あやうけーあやうけー人
中君のそひはくうてあに梅花みむひらまは
あやうけーあやうけー人

あはれ

中納言の君

女房

口ー婦君の女房 薫君の小町とてあやうけー人
名はえはくお薫君の女房 薫君の
侍の女房の女房
竹川のそひのそひはくうてあやうけーあやうけー

て薫君とてあやうけー人

橋姫巻

うたの十帖

宇治の阿闍梨

宇治の八雲の法師後律師小あつこめうらうら
ひあつたらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
あつこくつひて世淨をくきとあつこくひも
まに今の律師小あつこく推印を徳角寺に
まゝに
まゝに

殿ねん

口一雲の侍名うらうらうらうらうらうら
どう殿君の御方のまじりし人ねん
は長あつこくひにまじりし人ねん
ひ一うらうらうらうらうらうらうらうら
若ゆりにうらうらうらうらうらうらうら

た迫ねん

人

権本巻

一人

白文の由文持く宇治の一人名は
あつこくひにまじりし人ねん

宇治の阿闍梨

宇治八雲の法師
後律師小あつこ

徳角寺

とつらハ

名はうらうらうらうらうらうら
あつこくひにまじりし人ねん

中文を更

白文宇治の御方うらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
あつこくひにまじりし人ねん
あつこくひにまじりし人ねん

宇治の阿闍梨

あつこ

浮舟巻

大内記及定

即初少瀬と名の書名の歌百大内大浦仲信の
むらさきさゆらして白雲にまひ〜

〜
浮舟あふまゆひ〜
大内記の歌とあはれなり〜

用備さう
宿さうり

白雲は舟を果〜
舟すらすらあひてあはれ〜

水鏡身

水鏡の影をみれば白雲の影は舟に
あはれ〜

男

白雲の波文を空信〜
舟の浦は遠くあはれ〜

内舎人

舟の影をみれば人さし舟の影〜
の影のあはれ人

右近大史

右近の〜

まき

中近のまきは舟の影をみれば〜
舟の影をみれば〜

かぬの巻

中近の巻
舟の影をみれば〜

浮舟巻

女

浮舟の影をみれば人さし舟の影〜
舟の影をみれば〜

小宮お若

舟の影をみれば人さし舟の影〜
舟の影をみれば〜

大郎

兼隆の女との女房兼隆の女房

大納言君

今上の女房兼隆の女房

兼の御方

日一女の女房兼隆の女房

中納言君

右の女房兼隆の女房

女

日一女の女房兼隆の女房

女

兼隆の女房兼隆の女房

右を女房

兼隆の女房

内舎人

兼隆の女房

宇治の河原

今、律師小あつち

兼隆

兼隆の女房

兼隆の女房

室より

兼隆の女房兼隆の女房

侍二人

横川の侍の女房兼隆の女房

侍長

兼隆の女房兼隆の女房

兼隆の女房

二の女

兼隆の女房

夏中納言

少中の尾君の舞の中納言の如し一糸夏中納言
のほろろしたたけはひまふりあはれを
とらまうたふらふら河海小夏中納言ハ舞臺君の
とき後ともき方て納言のよう月抄はほせりた
つあつあつとてふねいほ海の沈語ひさし

大納言

少中の尾君の住いふかき人との

主君

口一あのまらひ

主殿

口一あの住い人のゆらけらつらつら
てしつらつら

夏中納言

廿二日の廿五
日終るに由

夏中納言

